Libra I on vol.34

りぶらいおん

http://www.libra-sc.jp

特集：① 石川文化芸術部長インタビュー
② 寄稿：三矢勝司
「りぶらワークショップから 10 年」

11 月 15 日（土）
10:00 ～ 17:00
オープニングセレモニー
10:00 ～ 10:30
東口エントランス

11 月 16 日（日）
10:00 ～ 17:00
エンディングセレモニー
16:30 ～ 17:00
りぶらホール

みんな
きてね！

- りぶら中央図書館情報
- 私の一冊　vol.29
- 「じんじん」上映会報告

Libra りぶら
岡崎市図書館交流プラザ

図書館交流プラザ（愛称:Libra）は、「図書館」「活動支援」「文化創造」「交流」の 4 つの機能で構成されています。りぶらサポータークラブ (LSC) は、Libra の施設活用をサポートする活動をしています。

りぶらいおん©LSC

問題がないんだったらやってみればいい

文化芸術部長　石川啓二

この４月から、岡崎市文化芸術部長に就任された石川啓二氏に、お話を伺いました。

Q 文化芸術部長の仕事とは？

メインの仕事は、りぶらや美術博物館・市民会館・社会教育施設の管理です。市役所には 36 年勤めているのですが、今までは土地関係、特に用地買収の仕事をやっていました。文化芸術部の所管である美術博物館がある中央総合公園の用地も買収しましたし、今後の市民会館をどうするのかという課題もあって、昨年度の人事異動で文化総務課長として白羽の矢を立てていただいたのかなと思います。

正直なところ、絵画などの芸術にはあまり興味がないのですが、今までご縁のなかった世界に繋がりを持てたので、ありがたいなと思っています。

Q 岡崎といえば芸術の町という印象がありますが。

私は「芸術」というより、「文化」だと思っています。岡崎が発祥といわれている浄瑠璃（矢作神社）や内田先生のジャズコレクションなどは、まさに市の財産だと思います。これから観光に力をいれていこうとしていますし、もっとアピールする機会は増えてくると思います。

Q りぶらの印象はどうですか？

図書館と市民活動、それぞれの機能が複合した施設ですね。静かなものと賑やかなものという、パッと見て異質なものが共存している感じがいいと思います。

Q りぶらは変わりますか？

レストランの後にコンビニを入れることが決まっています。実は市役所にコンビニを入れたのも私なんです。それから、こういう施設は無休でもいいかなと思っています。お金を儲ける必要はないけど、お客さんを呼ぶ必要はありますし、来ていただかなければ意味がないですからね。夏はクールシェアスポットとして利用していただき、家庭でのエネルギー消費を抑えるとか。

Q 市役所に勤めるきっかけは？

農家の次男坊なんですが、大学 2 年生のときに事情があって、私が跡取りになりました。農家もやりつつ働けるということで、地元の市役所を選んだんです。学生時代には電気屋でアルバイトをしていて、そこで養子にならないかと誘われたこともありましたが、今の時代を思うと、あのまま電気屋になっていたら、もっと大変だったかもと思います。

それで、実は一度も岡崎を出たことがないんです。だから、子どもが大学に入るときには家を出てけと言いました。たった 4 年間ですけど、きっといい経験になると思います。

Q お孫さんが生まれると聞きました！

今度、6 人目の孫が生まれるんですよ。孫とスキーに行くのがいつも楽しみで。ちなみに嫁さんとはスキー場で出会いました。夏はバーベキューをしたり、休日は家族で動くことが多いですね。

Q「市民協働」をどうお考えですか？

手間ひまのかかることだなという印象がありますが、スタートの段階からみなさんの意見を聞くのはよいことだと思います。市民満足度が上がることと、市民協働は密接に関係していると考えています。

Q お話を伺っていると、石川さんは市役所の職員のイメージと違うなという印象です。

公務員らしくないということは、よく言われます。公務員の中には、前例のないことはやりたがらない、触りたくないという方が多い。みんなお手本がほしいんです。

しかし、お手本がないということは、自由にやれるということだと思っています。行政なので、法的な裏付けは必要になりますが、問題がないんだったらやってみればいい。ダメなことがあれば、それをクリアするために検討をすればいいんです。

Q 最後に一言お願いします。

市民会館が、平成 28 年の 10 月にリニューアルオープンする予定です。私は、平成 28 年度で定年退職なので、市民会館の長寿命化については、内田市長の選挙公約でもありまして、市制 100 周年の目玉事業でもありますので、最後まで直接関わり続けていきたいと思っています。

りぶらワークショップから 10 年

～ 困ったら、りぶらに行こう！ ～

三矢勝司

岡崎における参加のデザイン戦争 !?

今や、岡崎市においてもそれほど珍しくなくなった、公共施設設計に関する市民参加ワークショップですが、その歴史的転換点となったのが、岡崎市図書館交流プラザ Libra であることを、どのくらいの皆さんがご存知でしょうか。私は千葉大の大学院生時代に、市民と共に公園や施設を設計する「参加のデザイン」を勉強しました。

そして 1999 年に、現在「NPO 法人岡崎まち育てセンター・りた」の事務局長をしている天野裕氏（竜美丘小学校の先輩後輩の関係）と結託して、「岡崎でも参加のデザインをやってみよう！」と、市民や行政の皆様に吹聴し始めました。

当時、岡崎市の某課に交渉したところ「岡崎では、ワークショップは時期尚早」と、取りつく島のない状態でした。このような市役所の冷たい扱いにも我々はめげず、例えば 10 年がかりで、竜美丘学区にある奈良井公園を市民参加によりデザインし、この市民提案が尊重される形で改修されたことも、今となっては良い思い出です。

りぶらワークショップへの道のり

りぶらの設計ワークショップが始まったのが 2004 年でした。この頃、私は東京に住んでいたので、りぶらワークショップの度に岡崎に戻ってくるという生活をしていました。

私がこのワークショップに関わる機会を得たのは、自分が千葉大でお世話になった延藤安弘先生が、りぶらの設計ワークショップの総合コーディネーターを務めることになり、この下で実務を統括する立場で招聘されたのが理由です。当時、ワークショップ（年間 6 回ほか、ミニ集会多数）の企画や運営、さらに市民意見の建築設計への反映をしました。

私の参加のデザイン歴において、りぶらは 10 作目です。それまでに、公園や小学校の建て替え、福祉施設や公営団地設計などに携わりました。りぶらワークショップに関連して思い出されるのは、千葉県四街道市の福祉施設を核にした複合施設（2002 年）です。ワークショップを経て、施設管理者のパートナーになりうる市民組織が生まれました。今のりぶらサポータークラブのようなものです。しかし、これは失敗に終わりました。

私は、施設設計ワークショップの企画運営を、仕事として関わっていたのですが、施設の運営段階では契約が終わり、手出し・口出しのできる立場にありませんでした。これも災いして、行政の担当課が整備担当から運営担当に切り替わる際に、市民参加の成果は引き継がれず、運営段階における市民参加は実現できなかったのです（この市民組織は、その後 4 年～ 5 年をかけて、施設管理者と関係を構築しています）。

このような苦い経験もあったので、地元岡崎のりぶらにおいては、計画段階のみならず、運営段階にバトンタッチするところまで、市民参加の流れを途切れさせない、というのが私の願いでした。

またりぶらは、延べ床面積が 2 万㎡を超える大型複合施設ですが、私が知る限り、これだけ大規模な公共施設において、これ程の市民参加を取り入れた例は、日本において未だかつてありません。りぶらの設計過程を市民に向けて公開することを覚悟した岡崎市役所の皆様には、感謝

の気持ちでいっぱいです。そして、これだけの大物だからこそ、私は東京の会社を辞めてでも、りぶらワークショップを本気でやりきりたい、と思いました。ということで、2005年に岡崎に帰ってきました。

10年前のりぶらワークショップ

りぶらが開館したのは2008年です。2004年に建築の基本設計、2005年は建築の実施設計、2006年から工事が着工して2008年に完成しました。以下、当時の5ヵ年の様子を概観します。

2004年は、りぶらの基本設計が検討されました。市民・行政・建築の専門家が集まり（約100人）、一緒にりぶらのあり方について議論するワークショップを開催しました。

まず、施設への夢を語り合い、敷地の現地散策もしました。また、りぶらの建設用地が、その昔、岡崎城の城郭の一部であり、お堀があった歴史も共有しました。この議論の成果が、例えば「伊賀川の水辺の心地よさと木陰での読書、そして図書館がつながる施設デザイン」や「昔、お堀があった場所に、人々が集える外堀ガーデン（現・お堀通り）をつくる」として結実しました。

2005年は、詳細空間や施設運営方針の確立が進められました。お堀通り（りぶらを東西に横切る通り）では「友達とおしゃべりして、お菓子やジュースを飲むことが出来る」といった運営の考え方が確認されました。あわせて、活動コーナー（市民活動センター脇）やボランティアルーム（図書館内）に設置する椅子やテーブルも、市民の皆さんの要望を踏まえて選定されました。

なおこの頃は、ワークショップ当日に参加できない方でも、りぶら整備の進捗を知ることができるようにと、康生の空き店舗を活用して、まちづくりスタジオを構えていました。

2006年には、りぶらの建設工事が始まりました。この頃の活動が、今のりぶらサポータークラブを生み出すことになりました。当時は、図書館・シンポジウム（市民的議論の場）・ホール・歴史資料館・情報発信といったテーマを中心に、似たような関心をもつ市民らがサロン（部会と命名）を形成し、「やれることをやってみよう！」と活動を起こしました。

2007年は、前年の議論や実践を踏まえて、さらに年次計画を立案、実行する「プロジェクト制」で、りぶらサポータープロジェクトが本格化していきます。全11プロジェクトが立ち上がりました。

託児サービスの具体化や、りぶらぶらりマップの企画と発行、むかし語りの会の立ち上げなど、今のりぶら運営に直接的に影響しているものも、この頃開発されました。ちなみに、この頃の進め方は、愛知万博のご縁でつながり、りぶらワークショップを一緒に企画してくれた横浜の知人（沼田君）によるものです。この頃、横浜の市民プロジェクト方式を岡崎に取り入れたのです。

そして2008年、りぶら開館の年です。それまで、りぶらサポータープロジェクトの事務局は、「りた」（三矢及び天野）が担ってきましたが、りぶら開館と同時に、りぶらサポータークラブとして独立しました。事務局も、今の戸松さんらを初めとした市民の皆さんに移管されました。

私自身、市民参加による公共施設整備にはいくつか関わってきましたが、その多くが2～3年で仕事としての関わりが終わるため、市民組織の自立化までお付き合いする機会に恵まれません。りぶらの場合は、関わっていただいた市民の皆さんの熱意と、行政担当者の理解に恵まれたことで、ここまでの状況ができました。

りぶら開館から6年

りぶらの利活用は、量も質も、想定を上回るものでした。岡崎市が想定した目標来館者数は、年間100万人です（移転する前の図書館が年間40万人）。結果は、160万人でした。開館から3年はこの勢いが止まらず、近年多少数字が下がってはいるものの、150万人程度と伺っています。このため、りぶらは、国内の図書館を核にした施設の中でも、有数の成功例とされています。

また、りぶらワークショップで、中高生らの声にも耳を傾けてきたのですが、結果として、若くて新しいエネルギーに満ちた空間となりました。

ガラスを多用した開放感のあるつくりはのびやかで、一言でいえばカッコいいですし、自分が高校生だったら、絶対に行きたくなる、人に自慢したくなる空間、というのが私の評価です。あわせて、開館後のりぶらまつりでも、中高生など若者がボランティアとして参加している点も特徴的だと思います。

りぶら開館後の特筆すべき事項は、りぶらサポータークラブが、施設の管理運営に携わる市の職員に対して、自立的立場を確保しつつ、かつ、連携をとれるパートナーとして機能している点です。

例を２つだけ紹介します。一つは、一時期、世間を騒がせた「りぶらハック事件（2010 年）」です。りぶら HP にアクセスして情報収集するプログラムを開発した市民が誤認逮捕され、新聞沙汰になりました。詳細は割愛しますが、りぶらサポータークラブは、施設管理者・委託業者・利用市民、あるいはこの問題に関心をもつ国内の有識者らの間を媒介・調停し、関係者の和解に持ち込むことに成功しました。これは、りぶらサポータークラブが、利用する市民と管理する行政の間に立てることを証明した事件でした。

今一つは、りぶら講座の成功です。今や、りぶらを代表する市民参加プログラムを開発したのは、りぶらサポータークラブです。2013 年実績では、年間 3 回（6, 9, 12 月）開催され、各回 70 程度の講座が繰り広げられました。これは、教えたい市民と学びたい市民を橋渡しするプログラムであり、その実現プロセスは、市民と行政の協働でした。

私は「年に 1 回、1000 人が集まるよりも、年に 100 回、10 人が集うことの方に価値がある」と信じて疑いませんし、それが、市民社会のあり方だと考えています。この視点からみると、りぶら講座は、岡崎の市民社会化を具現化する現場であるといえます。

また、2013 年 10 月には、りぶらの新しい機能として「Oka-biz」が追加されました。これは、ビジネスサポートセンターの進化系であり、ハンズオン型ビジネス支援（経営者に伴走し、成果を生み出せるよう、継続的かつ現場に即した支援）を特徴としています。相談件数は月 100 件を超えるとされ、岡崎のローカル経済に新風を巻き起こしつつあります。

このように振り返って思うのは、実現の過程のあり方は別にして「中高生に愛される場所」「市民でも行政でもない立場から、りぶら利用者を応援するサポータークラブ」「りぶら講座」「ビジネス支援を得られる図書館」など、全て 10 年前のりぶらワークショップで語られていた夢ばかりです。りぶらワークショップは、10 年後を予言していた、と言えるくらい、先進的な提案に満ちていました。

これからのりぶらへの期待

今後のりぶらに向けて、私が期待したいことを二つ述べます。一つは「りぶらは、岡崎の未来を予言する場でありたい」ということです。ちょっとやそっとでは実現できないくらい、大きな夢がりぶらで語られ、それが誰かの心に残り、あるいは機が熟して、5 年後・10 年後に実現する、そんな岡崎の未来への思いが集まり、発信される場であることを希望します。

もう一つは、りぶらの整備段階でご指導いただいた、小川先生（当時、NPO 法人図書館の学校副理事長）の話を引用します。ニューヨーク市立図書館のスローガンが「困ったら、図書館にいこう」です。かの地では、仕事がなくて困ったとか、災害が起きて困った、という市民の「困った」に答えられる図書館であろうとしています。智恵と情報の拠点として、そこに行けば自分に役立つ情報にアクセスできることを保障するのが、図書館のあるべき姿というわけです。

そこで、私の二つ目の期待が「困ったら、りぶらに行こう」です。これからの日本では、行政ではどうしようもない問題が増えていきます。認知症高齢者を地域で受け止める、空き家を適正に管理活用する、災害時に市民が助け合うなど、です。そんな、どうしようもない社会問題に立ち向かう時の拠り所として、頼りになるりぶら、りぶらサポータークラブであってもらいたいと思います。

三矢勝司（みつやかつし）
1975 年、岡崎市生まれ。岡崎北高校を卒業後、名古屋工業大学に進学し、建築デザインを学ぶ。千葉大学大学院にて、参加のデザイン、参加型まちづくりを学び、東京の建築事務所や千葉の NPO などで働く。
2004 年のりぶらワークショップを機に故郷・岡崎に戻る。2006 年に、NPO 法人岡崎まち育てセンター・りたを設立、事務局長を務める。2012 年より、名古屋工業大学の特任助教。同大学のコミュニティ創成教育研究センターの設立から関わり、コミュニティ工学を巡る研究と実践に奔走している。

りぶら中央図書館情報

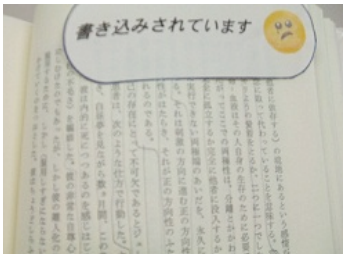
図書館の本は大切にご利用下さい！

図書館の資料は、市民のみなさんの大切な財産です。より多くのかたに永く利用していただきたいものですが、残念ながら本が傷ついて返却されることも少なからずあります。その事例は様々で、水に濡れてしまっていたり、本に書き込みがされていたり、赤ちゃんや動物にかじられているということもありました。また、アイドルが載っている雑誌では、特定の人物やグループが掲載されているページがごっそりと切り取られてしまい、他の人が利用できない状態になっていました。それらの本は貸出ができず、廃棄するしかありません。

なお、資料を紛失したときや、状態がひどく次に利用できない場合は、現金または現物にて弁償していただきます。破損や汚損した場合は、一度状態を確認してから判断させていただきます。また、ページが破れたときは、セロテープ等で修理すると本が傷みます。職員が専用の用品で修理しますので、そのままの状態で破れたページを一緒に中央図書館へお持ちください。

担当：中央図書館 資料提供サービス班（電話 23-3115）

水に濡れた本



書き込みがあった本

レファレンス事例集

昔から自然が猛威を振るうたび、大きな被害を受けてきました。人間は被害を受けることにより強くなり、また防災のための技術が発展してきました。過去の災害についてのレファレンスを紹介します。

質　問	伊賀川が明治１５年と明治２７年に氾濫した。その際の新聞記事がないか。
回　答	新聞の記事を確認する前に、月日を特定する必要があるため、【資料１】にて主要な雨の被害のあった日を確認。次に明治期の新聞【資料２】と【資料３】を調べてみる。【資料２】に小さな記事があり紹介する。次に三河地域が掲載されている【資料３】調べてみるが、その時期が欠落していたため確認できず。 新聞記事以外に、伊賀川関連のほかの資料を探す。地域資料検索で「伊賀川改修工事」を確認したところ、記述のある【資料４～６】があったので紹介する。
キーワード	「新聞」、「三河」、「伊賀川」「改修工事」
参考資料	【資料１】『愛知県災害誌』愛知県総務部消防防災課／ 1970 年／ A369 ア（地域資料） 【資料２】『朝日新聞　復刻版　明治 26 年 7 ～ 8 月』8 月 25 日分／朝日新聞（自動書庫） 【資料３】『新愛知（縮刷版）　明治 26 年 4 ～ 12 月』（8 月分欠落）／中日新聞（自動書庫） 【資料４】『碑は語る』渋谷 環・著／ 2005 年／ AO517 イ矢作川（岡学ゆかり） 【資料５】『知っておきたい岡崎の人物伝　第 1 号　石川数正・浅井浅次郎』市橋章男・著 2004 年／ AO289 シ（岡崎学） 【資料６】『新編　岡崎市史　20 巻』24 ｐ／新編岡崎市史編さん委員会／ 1993 年／ AO233 シ（岡崎学）

岡崎むかし館の活動②　「夏休み社会科自由研究の支援と作品展」

（りぶら１階の歴史資料展示室「岡崎むかし館」の活動をご紹介します。）

毎年 10 月に 2 階ギャラリー空間で、むかし館と岡崎市立小中学校の社会科の先生による「社会科研究作品展」を開催しています。子どもたちが、くらしの中で感じた疑問や気になった事を取り上げ、丁寧に調べて意見や考えをまとめた作品や、地域の歴史や文化について丹念にフィールドワークをしてまとめた作品など、多くの力作が展示されます。

むかし館では、「社会科研究作品展」を開催するだけでなく、社会科自由研究に取り組む支援も合わせて行っています。夏休み期間中に、むかし館主任専門員による「夏休み社会科自由研究相談会」をりぶら開館以来開催。また、子ども図書室やレファレンスカウンターと協力し「社会科自由研究のヒント」となる図書紹介リストも配布しています。そうした成果か、社会科自由研究に取り組む子が少しずつ増えてきているそうです。

さて、今年の「社会科研究作品展」は、10／4～14 までの 10 日間を予定しています。毎年、どのような作品が出品されるか楽しみにしています。子どもたちの発想から、私たち見る側にも新たな気づきがあると思います。ぜひ皆さんも、じっくりと作品をご覧になってください。　担当：中央図書館 企画班

平成 25 年度社会科研究作品展

私の一冊　vol.29

「がばいばあちゃんの幸せのトランク」

島田洋七：著　徳間文庫

目標に向かって進んでいる人は、キラキラと輝いており、むしろ華やかささえ感じられる事がある。よくよくたどってみると、そこには人には言えない苦しみや、ひもじい生活すら楽しんでいるかの様に、先を見据えた生活ができている、とこの本から感じた。

著者である島田さんは、当時駆け落ちをし、トランク一つに２人の夢を詰め込んで東京へでてきたものの、職をさがしてくうちに壁にぶつかり、苦労をしながら成長して行く過程がそこにはあった。

人々の温かい心に触れ、新たな発見も指摘されたとき、素直に受け入れる事のできる著者の心も、また純粋であった。芸人になるという夢もでき、下積み生活をしていく中で、お金がなくお水で乾杯をしたり、一本のマヨネーズをみんなで分け合ってお腹を満たした事もあった。

ひもじい生活を送っていたが、「お金がなくてひもじいわけではない。「これは、ただ貧乏ごっこをしているだけなんや」と、どんなに辛く苦しい生活の中でも、決してマイナス思考にならず、がばいばあちゃんの教えのとおり、辛いときこそプラス思考で乗り越えてきた。だからこそ一世を風靡する事ができたのだと思った。

支えてくれた人々の気持ちが、彼らの夢をかなえる偉大なパワーとなっていたからこそ突き進むことができた。私はこの本に出会い、主役ではない影の支えの底力を知り、プラス思考的な考え方を持つことは、気持ちを随分楽にする方法なのだとわかった。

読書が苦手な私でも、最後まで集中して読む事ができた本です。みなさんもこの本を読んで、がばいばあちゃんのプラス思考で、ほっと和んでみてください。

栗毛野 亜泉（くりげの あい）
りぶら市民活動センターに勤務。
市民活動支援・ボランティア登録・情報誌の作成などをしています。
ボランティア活動に興味のある方はぜひ、窓口へお越しください。

『じんじん』上映会　開催報告

↑水越図書館長の挨拶

8 月 21 日（木）りぶらホールにおいて開催され、午前の部 143 名、午後の部 116 名、夜の部 109 名、合計 368 名の方に鑑賞していただきました。

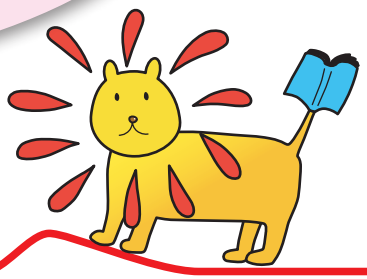
午前の部では託児のご利用もあり、「企画して下さりありがとうございました。娘を託児して、ゆっくりと見られたことに感謝します。私の実家は北海道旭川でとても懐かしく、風景を見て涙が出ました。求めている愛の形が違うことで親子がすれ違ってしまう。とても心に響きました。家に帰ったら子ども達にたくさん本を読んであげて、またゆっくりした時間を作りたいものです」という感想を書いてくださいました。

また、大地康雄さんのファンという方や、ラジオで大地さんの話を聞いたという方もいらっしゃったようです。「子どもに伝える思いがとても感動的に描かれていました。また、子どもの心に残るものというものも考えさせられました」というように、大勢の方に「よかった」「感動した」という感想を書いていただきました。そして、「ぜひ、剣淵町へ行ってみたい！」という方も何名か。

岡崎にも、絵本や映画を通して感動を伝える活動をしている方々がいます。その拠点となっている「りぶら」での『じんじん』の上映会でした。今後も、このような企画を進めて行けたら思います。

岡崎図書館まつり実行委員会
上映会担当：りぶらサポータークラブ

チケット販売にご協力いただいた皆さま、
ご来場いただいた皆さま、staff の皆さま、
ありがとうございました !!



りぶらいおん©LSC

※ 配布した今号の一部に、下線部分の数字が間違っているものがありましたので、お詫びの上、上記の通り訂正させていただきます。

Libra I on vol.34 2014/9/1 発行　2008/11/1 創刊　◆編集・発行：りぶらサポータークラブ
〒 444-0059　岡崎市康生通西 4 丁目 71 番地　岡崎市図書館交流プラザ市民活動センター内
TEL/0564-23-3114　FAX/0564-23-3142　info@libra-sc.jp　http://www.libra-sc.jp

そうだ！りぶらをサポートしよう！
(1) 活動サポーター（登録のみ）
(2) 賛助サポーター（年会費）2,000 円